

令和 2 年 4 月 30 日現在

機関番号：37105

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18297

研究課題名（和文）現代民主主義論における時制の理論的特質 政治権力の過去・現在・未来

研究課題名（英文）On theoretical characteristics of tenses in modern democratic theories: past, present, and future of political power

研究代表者

鵜飼 健史 (Ukai, Takefumi)

西南学院大学・法学部・教授

研究者番号：60705820

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、民主主義の時制に関する理論的な特徴を、民主主義自体の成立可能性と対峙しながら、明確化した。本研究では、量的に計測可能な継続的な時間としてのクロノスと、時間の質的な変容を伴う行為の時間としてのカイロスという時間意識が導入され、自己統治の形態が論じられた。本研究の結論は、民主主義の現在が過去や未来に対しても接続と断絶が共存した、両義的な態度を取らざるをえないということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、政治体制としての民主主義を時間論的な観点から考察して、民主主義の可能性を引き出す点にある。この理論的考察は、加速化する政治情勢における、民主主義のあるべき形態を明確化する。本研究では、民主主義の時間的特質として、クロノスとカイロスの交錯を見出す。この場合、カイロスの効果は、クロノスの時間軸を解体することで既存の主体と空間のあり方を絶えず不安に陥れながら、所与の民主主義の形を脱構築する点にある。その活動では、何を正当な時間として受け入れるのか自体が、高度に政治的であるという事実が明るみになる。

研究成果の概要（英文）：This research aims to make clear the theoretical characteristics of tenses in democracy which may have close relations to the foundation of democracy. By introducing two sorts of temporality, Chronos (the durative and countable time) and Kairos (the performative and transformative time), this research analyzes the form of self-governance in past, present, and future. What we have found out is that the present of democracy exists at an ambiguous timing when both Chronos and Kairos coexists. Therefore, our democracy cannot help but assume an ambiguous attitude toward its past and future, which contains some connections and disconnections at the same time.

研究分野：政治理論

キーワード：民主主義 時間 政治権力 政治的代表 クロノス カイロス 政治的責務

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

政治学における時間は、産業化の中で民衆が行使するあるいは行使される、政治権力の特質として議論されてきた。先駆的に政治の時間的性質と向き合った永井陽之助によれば、時間の近代化において、前近代的な生活様式と密接に関係した時間の象徴的な性質が切り落とされ、時計時間に時間が一元化されて、「もはや時間も場所も[...]再生可能で、反復可能なものとなった」(永井陽之助(1979)『時間の政治学』中公叢書40頁)。別の言い方をすれば、時間は量によって測られる対象となり、権力の源でありかつ目的となる。ロバート・ダールにしたがえば、いまや時間は、民主主義の主要な制約要因であるとともに、私たちに不平等に配分されている政治的資源のひとつである(Dahl, Robert (2006) *On Political Equality*, Yale University Press, pp.51-55)。

民主主義の制度化が一応達成されたとされる現代の政治状況でも、民衆による自己統治の実効性を高める意欲は民主化の過程から失われておらず、時間の民主化との接続が引き続き求められている。こうした二重の民主化にあって、21世紀に一般的な、政治に対する全般的な不信は、政治的な時間の統御をめぐるシステムの限界を示している。本研究では、これまで部分的にしか議論されなかった民主主義の時間論的な特徴を体系的に考察し、ますます加速化が叫ばれる現代社会分析の一助となることを目指している。

2. 研究の目的

本研究では、民衆による自己統治としての民主主義が、時間といかなる理論的な関係にあるのかを考察する。とりわけ、過去・現在・未来という時制(時間的様相)の政治理論的な特徴を明確化する。この課題は、民主主義が「いつ」成立し、「いつ」を目的として、「いつ」の民衆によって担われるのかという、民主主義の成立可能性の根本にかかわる。民主主義の時間的な特徴を明らかにすることは、政治体制としての民主主義の固有性のみならず、なぜ現代民主主義がかくも時制(とりわけ過去と未来に)に執着するのかを理論的に説明する。私たちが現在の自身への再帰的な問いかけとして時間と対峙することは、民主化によって権力のみならず時間を手にした民衆の不可避的な活動であり、それ自体が民主主義の一部である。

3. 研究の方法

民主主義が過去に執着する政治体制であることは否定できない。初年度では、こうした容易に観察できる民主主義の一般的な傾向と不可分だと思われる、その背後にある過去との理論的な関係性について考察を深める。本研究では、過去による民主主義の理論的制約の事例として、八月革命説とプリコミットメント論を分析する。八月革命説とは、1945年8月のポツダム宣言受諾により、主権の所在が天皇から国民に移行した法的な意味での革命がなされたとする説で、憲法改正案の内容がほぼ固まった46年5月に宮沢俊義によって提唱された。八月革命説によれば、ポツダム宣言受諾時において国民主権は与えられており、それは変更不可能なものとして現在の政治を規定している。本研究の眼目は、八月革命説の過去がフィクションであるという点を指摘することではない。現在の民主主義が自らの正統性を過去に求めるかぎり、宣言受諾を革命として理解する必要性は失われず、そのかぎりでは歴史的事実とフィクションとを区別する境界線は宙吊りとなる。本研究では、民主的な国民国家を措定する際の権力作用はもちろんのこと、クロノスの設定という政治闘争の次元を明らかにしたい。

次年度の課題は、民主主義の現在が、過去や未来に対してどのような優越性を持ち得るのかを分析することである。本研究ではカイロスにその可能性を見出す。その際、「はじまり」に政治の現在を求めたアレントの議論が再検討される。彼女にとって、自由こそ政治の存在理由であり、それは「はじめるという純然たる能力」である。人びとの活動が織りなすアレントの政治は、クロノスとカイロスとを区別し、過去になかったものを現在に創出する。人間の現われに結集する自由と活動と政治はそれぞれ互換的であり、民主主義的なはじまりをもたらす。はじまりは根拠づけるものであると同時に、根拠づけられるものでもある。カイロスでは、予見不可能な未来に向けられた活動が、過去と断絶した現在にあり続ける。このように常に現在が出現するカイロスでは、近代国民国家を典型とするような、制度的にも歴史的にもクロノスの産物である組織とは区別された永続的な制度を樹立する。

最終年度は、未来が民主主義の形式をどのように規定するのかを考える。民主主義の未来を考える上で、示唆的な事例を目にした。EUからの離脱の是非を問うたイギリスの国民投票(2016年6月)で離脱派が勝利し、残留派の首相が辞任するという一連の政治変動である。だが本研究の関心は、次の首相に誰がどうやって選出されたのか、イギリスやEUが今後どうなるのか、あるいは政治手法として国民投票は将来どのように使用されるべきかなど、それぞれ未来に関する政治的知見とは直接結びつかない。本研究が目指すのは、女性二氏による新たな与党首の選出過程で、出産経験のある候補が「母親であることは国の未来に本当の利害があるということだ」と発言した事件である。この発言によって引き起こされた社会的な反発が大きな理由となり、同発言者は候補を辞退することとなった。本研究では、デリカシーのなさというあからさまな欠陥によって見えづらくされてしまった、この発言が想定する未来 本当の利害がある未来 について、自覚的な分析を試みる。この意味で、通例は権力作用と無縁だと思われる未来の想定が、いかなる権力性を孕んでいるのかを問題化する。この未来をめぐる政治的発言に対する言説分析の検討は、本年度の研究出張の主要な対象となる。

4．研究成果

本研究の学術的意義は、政治体制としての民主主義を時間論的な観点から考察して、民主主義の可能性を引き出す点にある。この理論的考察は、加速化する政治情勢における、民主主義のあるべき形態を明確化する。本研究では、民主主義の時間の特質として、クロノスとカイロスの交錯を見出す。この場合、カイロスの効果は、クロノス的な時間軸を解体することで既存の主体と空間のあり方を絶えず不安に陥れながら、所与の民主主義の形を脱構築する点にある。その活動では、何を正当な時間として受け入れるのか自体が、高度に政治的であるという事実が明るみになる。この意味で、民主主義がクロノスにもカイロスにも一元的に支配されておらず、過去や未来との対決を含みながら現在に正統性があることは、民主主義それ自体が持続する条件となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鶴飼健史	4. 巻 50巻2/3号
2. 論文標題 民主主義の過去と現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 西南学院大学法学論集	6. 最初と最後の頁 181-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴飼健史	4. 巻 2019年1号
2. 論文標題 生きている主権論 台湾政治学と主権の現実性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報政治学「主権はいま」特集号	6. 最初と最後の頁 204-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴飼健史	4. 巻 1150
2. 論文標題 時間の中の民主主義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 73-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 鶴飼健史
2. 発表標題 民主主義の過去と未来について
3. 学会等名 従属と持続：戦後東アジアとアジア主義 国際論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴飼健史
2. 発表標題 Theories of Living Sovereignty: Taiwanese Political Studies and the Actuality of Sovereignty.
3. 学会等名 政治経済研究室演講（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴飼健史
2. 発表標題 日本国憲法の言説分析
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第四回国際学術大会、台湾・国立台湾大学（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鶴飼健史	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 375
3. 書名 「代表と民主主義」西南学院大学法学部創設50周年記念論文集編集委員会編『変革期における法学・政治学の前線』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----